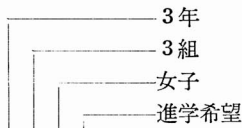


下表は誤りの種類である。

誤りの種類

誤りの種類	内 容	例
1. 誤字 (transcription error)	特定のけたにおける表示の誤り	正 1 2 3 4 5 6 誤 1 2 <u>8</u> 4 5 6
2. 転 倒 (transposition error)	左右の数字が入れかわった誤り	正 1 2 3 4 5 6 誤 1 2 3 5 4 6
3. ダブル転倒 (double transposition error)	一けた間隔を置いて左右の数字が入れかわった誤り	正 1 2 3 4 5 6 誤 1 2 <u>5</u> 4 <u>3</u> 6
4. ランダム (random error)	上の誤りが重なったもの	正 1 2 3 4 5 6 誤 1 4 <u>8</u> 2 6 <u>5</u>

- (2) 「チェックディジット」という方法がある。
これは検査用の孔をつけ加える方法である。
これは基本コードにウェイトをかけることから始める。



基本コード 3 3 2 6

上記、基本コードに「チェックディジット」を適当してみる。

計算の手順	例
1 基本コードの各けたに重みづけをするための乗数(ウェイト)をきめる。	基本コード 3326 ウェイト 1212
2 各けたごとにかかけ合わせる。	$\begin{array}{r} 3 \ 3 \ 2 \ 6 \\ \times \times \times \times \\ \hline 1 \ 2 \ 1 \ 2 \\ 3 \ 6 \ 2 \ 12 \end{array}$
3 積の和を求める。(このとき2けたの数字は1けたづつに分けて加える)	$3 + 6 + 2 + 1 + 2 = 14$
4 求めた和を10(または11)という係数で割り余りを求める。	$14 \div 10 = 1 \dots\dots 4$ 余り
5 係数から余りを引き、これをチェックディジットとみる	$10 - 4 = 6$
6 基本コードの末尾にチェックディジットをつける。	3 3 2 6 <u>6</u>

すなわち、(3, 3, 2, 6)のコードを検査するとき、最後の6の針金がこの検定孔を貫通すれば、そのコードは正しいという結果になる。
さて、お勘定場は出口にあるがマーケットにとっては「お金」の受付けである。
また、どの商品がどの位売れたかは「支入部」にと

っては情報の受付けであろう。

そして項目がふえればその度にコード変換・追加が行われていくことであろう。

そうすると「行事の受付係」のようにここでも店内の手続きを円滑かつ効率的であるようにコード化を整理しなければなるまい。

すなわち、思い付きでコード化を実施することをさげ合理的手段を選ぶようになるう。

今日、そのために下記のような「コードの種類」が紹介されている。

コードの種類と目的

	少ないけた数	固有性	分類の 便利さ	追加の 可能性	機 械 処 理	表意性
順 番 コード	○	○	×	○	×	×
区 分 コード	△	△	△	△	△	△
十 進 コード	×	△	△	○	×	○
けた別コード	×	△	○	○	○	○
表 意 コード	×	△	△	△	△	○
数字式文字コード	×	△	△	△	△	○

注：○-便利である △-まあまあである ×-不便なことがある

1 順番コード

項目に頭から一連番号を割りつけたようなもの

2 区分コード

項目をあらかじめいくつかのブロックに分け、それぞれのブロックの中で順番コードをつける。

3 十進コード

図書分類のように細かい分類の階層(下位数)とそうでない部分による構成で出来ている。

4 けた別コード

部、課、係のように階層をもったブロックにわけて、数あるレベルをもうけて分ける。

5 表意コード

「EW-30-W 30cmの扇風機」

のような表示による。

6 数字式文字コード

(あまり用いられなくなった。)

電算機時代は、このコード化が活発に進められている。このコード化による情報の処理は、コンピュータという受付係にとってはまことに具合のよい手続き番号なのである。コードさえあれば、コード表示された要素の範囲をもって、どしどし受付けた分類、集計などの申込み手続き処理をすませしてしまう。

したがって、現今を「コンピュータ社会」というならばあるいはコード化処理を実務にみるならば、このコード化の誤りが、まさに大きな影響を全体におよぼすものであるから、「受付け」の時点で、コードの点検をおろそかには出来ず、コード化に対しては不注意であってはならないのである。